

聖廟法樂連歌三物

伊地知文庫
文庫20
51



文庫 20
51

享和二年二月二十五日

菅家神退九百年萬句之連歌

於

摂津國西成郡南中島總社

天満宮興行

伊地知氏書冊

卷頭梅

初何

高辻前大納言



千里空ぬ名意か、そと花の兄

胤長卿

三川さそらふ遊むおちり舞

長昌

國土もろ敷りふ喜此面紙をて

昌逸

第二鶯

何般

神主滋岡上総介

嘗を神り法きのく石川善哉

長昌

以うきん霞むとつ乃あき雲

信行

柳葉の去年よりゆき色そひて

国庸

茅三震 手何

權神主上野介

春此よりを去りよかきぬのすみ哉

芳長

花の香如く家屋まのを此月

重郷

維多啼し屋上乃松の風落亭

祐木

茅四子日 何路

皇洲中庄

新川五左衛門

山松意ひうれて時を去る日うれ

盛恭

千世をむりあるおまへく此春

元徳

明和象空なり露のころ見えて

吉豊

茅五若菜 何本

和名名柄

中村久介

若あつむ津道もみれみら里う奈

貞将

種りしちらハ清一淡ゆき

元継

新なりけ春の精場と韻あへて

守約

茅六残雪 唐何

浪華

田中周安

雪と雪のにのこぬハ種乃老う奈

世文

本線四子まひきへ川春の風

延真

松枝のこゑを疎うり板の明々

安貞

第七帰雁 正字

同苗了民

越路よりくまもとへすつや政房

世顯

あすみやきりあゆきの幸山

貞忠

東雲れ月あつらふよきよひて

信弘

第九梅

何田

浪花

尼崎又右衛門

惠あつらふにさうよ家らう

文孝

苗代三川もゆこりあゆ里

嘉篤

轉あつらふの幸あつらふ

吉寧

第十梅 何人

西府天満宮別當

多川根もつら喜あつらふ

信賢

喜あつらふの産あつらふ

芳長

新日さくらあつらふの響りて

延陳

第十梅 何色

高田宰相

玉垣やあつらふれきあつらふ

福長卿

あつらふさつらふのつらふ

昌寅

大馬田の幸あつらふ

長昌

第十一花 山何

五條宰相

為徳卿

左乳農香や難波よ三川乃春の風
うすみよるる浦志あき浮
海人の舟のよら交波よ棹よりそ

安貞

玄川

第十二花 何衣

里村

さく花もあ年をすつのも陰哉
空津妻舟置りし海き梅の香
嘗渡つをさかた露を拂ひあき亭

昌寅

守約

正敏

第十三花 船何

西府天満宮権別當

花さう里白雪のしぬ屋まもあし
あきや清くせし四方の春風
まひらく都の糸も雪と帯て

信廉

賢就

昌逸

第十四花 所何

同 官司

花又のよら後之せむ風も丸
きく石舟のしをりあ家春柳
明らう海春の何色れ舟よひて

快傳

長昌

常候

第十五花 何心

春日

大東丹波守

花も今やまきに之象はうらなれ
まれ一菓せとよん庭はうらなれ
山里や新市のもうふ集あらん
元徳

延賢

貞将

第十六花 何言 同

大東後波守

松きうく常盤より花うら
これゆらまの藤さける中
雲をれ浮橋えたる波をり亭
延貞

延陳

貞吉

第十七花 何世 同

中常陸介

咲花もあま三川秋のめらみ哉
か勢も乃とらよてる新日事
谷川のこゆりも今ふひり足て
時美
世文
止名

第十八花 一字 霞歌

何世作也

三森越後

まらしやまな紙日あられ花盡
かすみりし西流雲きゆる峰
時言をりれ夜うく啼捨て
定順
信弘
庸政

茅十九花 喜何

春日

今西三位

花の種つきぬあらたけ林の那
たうき日殺越さるゝ山のみ
昔あはさすみの衣身よりきこ

祐木

将英

信弘

茅二十花 唐何

唐橋前宰相

と里阿下ぬ手向はをれのうけり哉
あて作くや神かきの毒
日の馬氣のしるはをせてしきこ

在熙卿

義達

吉豊

茅廿一柳 何路

兼原勘解由長官

神の惠きぬくまをちや糸柳
とろくの名をぬるむあき風
毒れり徳めらる河つ又舟うきこ

為弘卿

吉豊

玄碩

茅廿二躰躑 唐何 浪花

西山

い後ハち越入りにまある法しう家
かすみり西のちさうり思ゆる山
亭松より少のとれこも雪消て

宗祿

秀成

世顯

芳廿三款多 夕何

社家大町豊前

山吹のいそてもよとめをよの水 義達

あつらふうく河くぬ乃く終 知宣

群てき川きよの相風もうらぐもそ 融

芳廿四藤

何人 南部

土司内記

松の藤梅をくくはめ初ひう那 元継

朽くむ海生や志くふきたく支 世文

梓弓をくはゑみうく粒あう亭 昌寅

芳廿五蕨

下何

春日

若宮宮内

むらさねの拙ううく聆への初わくひ 春貞

小松乃末うくゆきき喜う勢 重郷

日此光うく家うくよりの雪舞て 芳長

芳廿六雪蕨

何人 南部

内藤齋

落家日哉とくむる聲う夕ひをう 重郷

ゆくあきくかすむやまの心 常倫

谷うみ花のさうに雪もあし 正明

茅廿七莖 花何

南都

岡井法橋

道草に藤ちるり此すみまは
春深うけ理のなる雨乃露
百言此變らちかすみ夜ハ明て

嘉篤

濟美

賢就

茅廿八春草

白何

同

大東仁兵衛

雪乃小も妻をみり此小葉う形
日のさけうてんゆ家うきろふ
作保娘の種不寸山やをかく森

延根

貴致

玄川

茅廿九蝶 二字

春日

奥三位

むつ控あて胡蝶もさう花の帯
かすみもぬくくかすみまこの
風あゝ家馬池のこけり翁初て

成隆

元徳

信就

茅三十永日 何本

清岡式部權大輔

ゆけき冬神代乃まは春日哉
法きぬ種まくくす所田乃原
つらうらわら古巢を又といふ

長親朝臣

吉寧

宗孫

茅世一 新樹

何叙

東防城女納言

柏葉の度前をし 長乃陰 尚長朝臣
六の節をよ免こゝも久せり 信新
捲あつる種もきつれもみどりまで 昌遠

茅世二 時鳥

何叙

社家後意信濃

ひききひらららの初音をきき
うの花月残るや家音く 喜斎
谷三川をまうたれらちよきりれて 貞忠

茅世三 若楓

何本

同

美濃

ち家秋をすそめてを若楓 吉寧
あけりくち家雨のこ家庭 祐木
小松風の新橋の山よ志つまりて 正明

茅世四 取神

何叙

南部

岡村五兵衛

作てり小宮あつち家林う菊 邦高
きよくやをらく祝子乃社 昌寅
名給ふ新此出戸り日ハ晴亭 貞吉

茅世五卯花 千何

同

北小路法眼

卯花の雪消る志川く枝の露
庭ゆく名り志けるうき子
秋をきむ燈火を宿より一んを

信系
守約
秀栄

茅世六牡丹 唐何

唐何

同

西村庄左衛門

今五日か不進手向此をらりくさ
ひうりも涼し露の玉のき
有明のい室おや杞しき舞の庭

知宜
融
元継

茅世七立花 何文

同

林田勇二郎

立花のめ初ひいさむうしこれ
すうぬ年ちき屋戸らうき子
露のゆ家一村あり夏ハ来亭

宗継
芳長
嘉篤

茅世八菖蒲 三字

三字

浪花

色藤清次

九節のおやめあき孫さうし哉
うし一撫くる新の若升
夕風の志すの玉れ露り亭て

邦教
世原
重郷

茅世九早苗 山何

南部

上司安藝守

妹をすちやまて涼きく早苗哉 延興

まゝや津巴よりわらふ家とふらぎ 義達

五月雨はいつらん水も浅うらそ 常倫

茅四十堂 御何

高辻女納言

お万津多ら志つらねるその螢の那 俊長朝臣

草木より乃こは揺ふその露 賢就

初雪に刺の糸山ハ歌まき亭 信弘

茅四十一五月雨 唐何

唐橋侍従

枝毎に喜むめくみや梅乃面 在經朝臣

生そふうけれたうきそ若井 信弘

後書汗の出る乃き舟とめそ 熊

茅四十二標 何人

社家俊通伴賀

かろへきて花れ香つり家標うれ 信行

朝の志つらやのこほ五月雨 正敏

郭云あくつら名又板ハ明て 嘉篤

茅四十三若竹 青何

同

和泉

吾井の子世縁ありし乃林の那
ありとせしらく松老ん家宰
落り家老の道あり此聲すみて

賢就
宣盛
員将

茅四十四水鶏

所何

浪花

奥野嶋二

柴の戸は祿免より海へ鳥鷗哉
木うけり友の月うすきや戸
菱おともいへるにすふ雪ふりて

有庸
信就
義達

茅四十五蓮

二字
返音

同

後辺治左五

冬もらふ池の石は乃をれ鏡
志け系玉簾の露はあつても
夕波りうらふ堂共ふ中をれ亭

宜直
昌寅
世文

茅四十六夕立

何屋

同

岡本八左五

揺ふもや雪にれ中へ峰乃松
きけハすしく蟬のなきあ急
すれすく新橋の糸面反くきと

常房
正名
知宣

茅四十七 瞿麦 何草 同

辻次郎右三

あてしこのかたも霞に恵の南 員忠

はきくま川世の雨た心新明 延陳

あき深のすしき水と弱とめて 玄川

茅四十八 納涼 花之何 同

中村吉五郎

涼しさハこふき松花葉ふ 國庸

かやまよきくま川世の雨た心新明 吉寧

調乃こゑす家富意日れきして 重以

茅四十九 扇 又何

南部

中沼上総介

蝉の羽もあゝぬ風と扇か葉 秀成

く川声あらし 朝の蚊柱 常任

をら秋をさよとくたる月出亭 長昌

茅五十 清水 何風

桑原大學頭

千代のうけうら守清もや神の庭 為顯朝臣

あ川をよふなる瑞を離乃月 元徳

梅の面あつく木末の春よ似そ 信行

茅五十二葉 夕何

五條侍從

涼しき流水の秋の川一葉うれ 為貴

浮葉をらふらさの海を渡り 守約

山遠くのこれる月を層啼て 元徳

茅五十二葉 何本

社家大徳隠岐

花よりさへ枝おもけちる白小萩哉 信弘

玉葉はつゆりりる中とふ庭 吉川

暗虫の聲もあつらうよや強て 宗継

茅五十三葉 山何

同 丹波

萩り風不紙さらぬ屋と重の葉 元徳

あこも川 輝の月不らき葉 延具

皆川のおれもあらく霞交て 世文

茅五十四葉

何田

浪花

大眉為三郎

芳月より小舟あひく夕の那 光方

くれす川むしの聲くみ暗と急 國庸

文らふ月より松をかまよりて 貴致

第五十五虫 何船

河原大久保

中西五郎官馬

昔く少りしと名や移むし神の迹

融

松をそのすくは申れ移りのき

秀策

葛うらう秋のめし花を穢をへて

雲蒸

第五十六麻

何

尾州

中西五郎官馬

いふ少き裾野を蒸のふらとれ

萬

蘇もすき蒸麩くゆふの勢

吉豊

あきの山起る面する雪をそそ

蓋盛

十四

第五十七露

一字 露

春日

西若狭守

あき風よ山端乃こ次男乃うま

師壽

波移すこいぬを川 居れ夢

延陳

新舟よりを故あうそよ舟出亭

祐木

第五十八露

何

濃原加納

岸田官兵衛

松う枝りま母の敷見ん 露徳玉

将英

姑う也きうく 滋原家屋万

嘉篤

有明若消ゆく 古り 鶴啼て

春貞

第五十九 秋田 白何

南部 田原口抄 納言

群 香も立舟のりある秋田哉
聖山のゆの原麻のり勢ふ
露のうき尾とおるよきそりて
宝 盛
元 継
芳 長

第六十 葬 何衣

川鱒前宰相

朝露や花の原とくろく物原
よる八月すむとろえし庭
きり原の弱も水踏又ひれきて
實祐卿
昌逸
守約

第六十一 草花 何路

葉室頭弁

きても石の理りやよそる夜袴
精ころも日煮さむき妹の髪
ゆらぬある夕れ月うらむき
頼壽朝臣
昌逸
義達

第六十二 女郎花 二字

西春 社家小菅右兵衛

おねもぬもおそくはきし女郎花
露をゆりた世逢の仮臥
旅あらしきよりおや立ぬらん
守約
宝盛
延真

第六十三暴風

何人 河原阪村

岡田次左馬

ハ千種又見とら世分の松乃色
入日の乃ち濃富れ月の半
有き交甲御の来り 厚落り
本房 薑茶 濟美

第六十四紅葉

御何 徳島加納

岡村与左衛門

赤の一本の川も志られて初りみち
中山音ちかく 麓れきくや戸
月めりひ志と重ととく秋風又
信就 世原 信新

第六十五鷹

初何

江戸 阪

飛鷹とまれのや文字法と祿歌
来て見家林乃世く此月花
夕露此をぬき木も種もかし
昌成 正明 元継

第六十六月

何垣

東

香川陸奥介

神と内いやりすける光の邪
松もさうきくを以つて危あけ
告砂地よ垂露志らく秋かけて
景柄 信弘 秀栄

茅古七月 千何

春日

辰布後路守

あふけく世冬久望此古乃月
いすのやおさる家重きりの岸
流落る水の上をのみりて

祐兄

正敏

長昌

茅古八月

唐何

浪花

八田五郎左衛門

月之斗や産もくものぬ神の庭
見乾るかみのまれをけさ
殊のう勢池の跨根に波のちて

幸亭

常任

種春

茅古九月 何草

住吉

津守上野介

おー世紙あわく世月若桂のれ
まやこをさーて層れら家重
駒もりよよきたあーまひるらん

國禮

宗孫

融

茅古十月

何取

押小路前宰相

片影素古りみちる宮の武
いゝおきさうぬ片割の案
色深ぬ枝よりから守徳友昭亭

實富卿

秀川

吉寧

第七十一月 花之何

櫻井上野権介

すむ月此うきや千里乃秋の雪 供秀朝臣

さうぬあしやあし寸言殿 玄川

ちら流る湯池の柳さうりまで 賢統

第七十二月 何心

社家沢田篤之允

小根交て月を見そむ家深山武 止名

橋糸の露乃志くれきあし 師孟

為る露さより帯や響ら舞 宣盛

第七十三月 手何

城員伏見 三橋法橋

雪ハ風よすくをて月流すむよ武 掃馨

海京とさくくつ家かりの絲 吉豊

鱈法る舟さきく屋海浦くれて 伝景

第七十四月 何人

攝員中務 浅田礼助

輝きこれハ明さくき一夢此月 道孝

出らく山窓きりをれりりり 昌逸

秋少交新橋乃林ひりそひて 時美

第七十五月

三字
中畧

持衣平路

三上傳在焉

昔々をきてとらに鏡やそられり

正明

岩絲露り糸屋との池より

種春

花うらる葉のまやう花房あめそ

伝新

第七十六卷

唐何

日

三上吉五郎

正ら音をきくみてとるや尊つ虫

正敏

みき里りうら付杖の世あり花

宗珠

河の邊若柳ハあやそ免ぬらん

喜齋

第七十七 持衣 何色

日

中瀬三三介

浦あみや髪うちそくし海人衣

常倫

板さむをらあふ破乃板の勢

庸政

新ちう紀若登れ月れう雲有て

祐兄

第七十八 蘭

新何

日

中瀬九吾五

法持も玉の臺かうはし葉

常任

檻ちうく津茂す免家庭

延根

妹うや池の反橋けり新ら春

昌亥

第七十九葉 花何

秋ゆく代あるしすれぬ園の葉 里村昌逸女

春くるのみの梅はみち葉 信弘

海よりくちけ小島の村まき 延賢

第八十九月 何世 滋野井中将

神さむし森の穉や秋の果 公敏朝臣

白木海かゝ家處乃後枝 玄碩

宮人の月をな家く種つきて 成隆

第八十一時雨 夕何 樋口弾正大弼

紅葉も手印よきふ時雨 宜康卿

小春より清交うみの後前 祐木

月も日あよる人のまよふ 長全

第八十二時雨 何色 里村法橋

定ぬれしとけふるまのし 玄川

雪濃きふきもまかし 長昌

秋末の旅れさむさや思ふらん 将英

第百十三 霜 初何 東 石井

板橋や少むあといふは家及の妻 了 陸

小草すー 里にこゆる河多 宣 盛

鶯鴨の心屋こそ寸むきておく 正 敏

第百十四 木枯 何田 洛東 徳有 前成 乾 徳

木くらしものさき美 芳 神乃松 賢 果

作けハきりし さゆる日れ年 融

雪たのる山の一と定をわけて 吉 寧

第百十五 寒草 青何 糸 細柳 春

村すきき冬世も秋のまごころ奈 橘 洲

小春さこれてさむき 船う也 成 隆

宙越乃さるの昔 奈やまゆらん 宗 孫

第百十六 残葉 何船 日 瀬尾 弥 兵 五

葉うりねぬをきやまごころ奈 教 文

冬ころりす家屋との松うき中 義 達

風さゆる庭の葉うき 結る人音 常 任

茅八十七 霰 白何 日

石井孫次郎

瑞蕪のうねぬ雪や玉おらけに
久員
川を冬あふ家杜乃うらぎ葉
延賢
雪うけに月をえる夜ハ空うらて
元徳

茅八十八 雪 何心 日

佐木宗菴

爰しまのまの埋まきし雪
尚新
たふふつきも雪空しの雪
邦高
花瓶は法印みおりの梅うらて
賢就

茅八十九 雪 蔭何

里村

風ふゆる松や志くみ揺きの波
玄碩
ゆえゆく杖津此芦う川の雪
伝系
はよらうき昔屋の軒よ月をえり
師壽

茅九十 雪 玉何

富路新三郎

白鶴砥見給布色曾松通雪
貞直卿
洲岩り乃らる冬此杖の月
長全
およほる破輪の波乃言返りて
師盃

第九十一 千鳥 下何

芝山官内大輔

波風又之川やかたきの中千鳥

國豊朝臣

葦原うまハこぼる白鳥

德基

かゝ霞の抱せむみ月落て

芳長

第九十二 水 花之何

社家寺井加賀

漲乃糸こきさて流小沙の那

種春

あき風きむく月乃と敷山

師壽

雪此の白木末あそむ落て

延陳

第九十三 水鳥 何手

皇民万所
伏屋権之進

水鳥此あしに志るき相うせ哉

素秋

舟み楳しよれ阿けくの案

吉寧

以こともくろく種のをさそて

邦高

第九十四 雲

三字
中畧

浪花
高光寺

夕されハ嵐もあえてみそれれ

勝俊

時人之数屋戸越乃ちち

時美

駒よりふ海谷川のあうれ

吉豊

第九十五 炉火 御何

按原平路

土橋七郎左兵衛

埋火乃あつりせきしぬるを哉

重賢

あつり免あつすや月雪共友

正明

あつり候壁山をるく物言て

義達

第九十六 早梅 何尊 春日

西三位

左や冬より暖やこの花松乃花

師益

春よこてあけ新のうらみ寸

宗继

初雪のききめつらに立出る

世昭

井田

第九十七 年内立春 何本 皇女 津田

年此内より年のくたやなる露

喜斎

冬さく梅乃とあみさけ枝

春貞

あみや日影すちけし雪啼て

守約

第九十八 神楽 唐何 浪花 林伊兵衛

本末乃聲もさゆや小枝神楽

直標

こゝろをうけはまゑ人共強

祐兄

池あり舟きけ夕月いつて

富盛

第九十九 神樂 何所

里村法眼

雖波うさうきふ名よおの宮み哉

昌逸

告砂めぬのしし 林葉の柔

賢就

新風ハ志つすうあさう去酒て

延根

巻軸 歳暮 何路

芝山前中納言

神垣や松も春す川 年此暮

持豊卿

千重にうきぬ白雪の白折小

芳長

八乙女共種まうくぬ日此きうて

昌寅

追加 巻頭紅梅 何人

東園侍従

これあ井の色ささひさし 梅は花

基仲朝臣

春やうきさす川のこと乃先

昌成

四方のまのうたにさみまろひて

光和

春日富田紀伊守

茅二春松 山河

春日若宮藏人

百枝さび松の葉数や千代乃春

春・葉

のすみもとのりハ重源寺

春日 福井雅樂 春・身

三枝戸ハ少りうらゝ又明知寺

南都東大寺 削賢

茅三雛子 夕何

京 土佐土佐守

法戸とあやきくはの原此上うすみ

光 貞

月此あ〜く徳時人のうらみ

春日 山田形馬 春・福

影うらみ梅うき深きあすみて

春日 福井左兵衛 春・信

茅四牡若 何屋

日 山本大等

咲つ〜くあうけ清〜うきつた

光 永

つゆれ玉藻を〜く波反乃日

日 中村丹次 美 春

雨晴〜初き〜く流落亭

南都大江尚敬 立 義

茅五海嶽 朝何

産摩社務 渡辺梅津介

みき〜しやまき〜にかな秋乃風

春日 福井舎人 政 館

白拵ふ〜き〜く友川のきみ

春 義

卯花のしらる〜く〜りに舟よせて

昌 成

第六葛

三字
中畧

浪花

田中順安

神垣より以て秋の心葛の産 近義

松皮の斬乃雲は霞を帯き 延弓

琴は多又月の下風かよひきて 時春

第七鴨

何鳥

滋國廣流

神原河内介

拙小屋く暗は三ゆつ田哉 長全

板井しりやうり水底る音 永貞

霞少き岩のをきぬハ苦むし 溥賛

第八月

何衣

浪花

田辺五郎兵卫

向重らかきりききまぬ法乃月 敬明

童少くふ舟り法め家秋の日 刻海

藤よか歌葉れらき葉又雲くあて 青重

第九時雨

初何

南部東大寺

不動院

以清くすて初てやふる村一連 永宣

木のた法りりて少き山三三 種敷

谷多れ声やこゆり張重るらん 貴準

第十雪 薄何

西府

連歌屋

雪向く木縹うそくりし神の松
昌因
月北かみ波妻ちり死の命
南院徳献寺
春日奥甲斐守
天任
山音の尾と死あらし言返て
成郷

第十一霞

八幡

柏村左吾儒

中ふす死にけり代の妻
美倚
水返連のとりき、晴る哉乃云
春日辰市徳岐守
祐要
玉をく流出る里り花も時あつて
南院東寺龍松院
澄存

第十二春雨

里村昌寅妻

霞少くき庭や木のめををる此面
安之
こゑを待えしきさのうらひす
延宗
よみしつれあひのさく後もうらりよて

第十三花

日次鉄肥
宮川源左衛門

面うけ八神代の花れしう香うれ
緘満
時簾の鏡りしう花梅の枝
春日辰井内
守討
乙女子うまますふさうくも深うり亭
永宣

茅十四時鳥

大山崎

中田拾津吉

一聲や千つうりつ川源とさき

順貞

知るれう中の遠色は清く

光永

及らさの名山より夜は明初て

方尊

茅十五皇

浪花

村田善次

すむ月れうきも涌つる泉の所

成尊

庭のきりくきくゆふのあはれ

永雄

床の及ら露よりうきふ花むし

重恭

茅十六朝

皇沢寺

源光寺妻

名ハ心うに日くらし此時朝由ら

樹冬時空そよそおきう勢

英敬

川岸ハ種しやうふ波さう亭

重政

茅十七紅葉

寺井加賀祖母

きても君よ錦織くく初りみち

屋戸分ち路意露少う支種

久永

胡き室と空りよ旅人立出亭

守富

春日後馬長門

秀臨丹民部

第十八月

社家大町越後

照す所家月やかり雁の花さう里
安之
まのうすみー層のう熟岸
帯信
秋風のあきやゆゆの重見の亭
長全

第十九 残佳

浪花

松平信吉

都々多み多田さう里れ中と里うれ
重政
それ月も見も寸志くまめく重
光昇
月うとき山終このたふうつり終て
英敬

第二十 神楽

南都

上司豊前守

世をて守教そふ神の庭火の好
延長
都々し此多あもてさう熟月
春日大西日向守
降つり伝雪にさめし重晴
日中周防守
時完

第二十一 子日

洛西西院

米川越後守

子甲てりくたうらうを世への松
安親
まねうあう流さ此小うま
延義
足ぬうれ市山やあてて震むらん
光昇

第廿二 蛙

浪花

岡利兵卫

一 算よれの多しうりにあつて蛙の形
ありしつらすは岸北のうき
露をきき梅をまれの春のけ亭
安之

延宗

重政

安之

第廿三 櫻

日

野里四所左門

露をれて香をきよおろしき梅
去も乃ときし一しゆらん此なる
殊りぬる 卯山流るるも歩と歩亭
延宗
美敬
延宗
延義

美敬

延宗

延義

第廿四 更衣

振原平野

山口文蔵

たちて今寝やあつ後も淨衣
わら葉の露はかみ糸うき
森のうみらんよ花のまうひて
敬明

常信

地下町
茂

敬明

第廿五 蟬

長壽

高橋登八郎

松も梅もそひえて信の聲
新又すししく落る山三川
月待とゆふ日きし入意おけて

貞義

祐族

寧兵

春日辰市石見守

南都東大寺

第廿六 楸

南都

東大寺上生院

波よちる楸とらあ家 溪室の形

訓海

あけりしと敷をうりうたさくの意

春桑

種貝に乃るる阿門さもすれ貝

同 紙谷善兵衛

直富

第廿七 月

浪花

河地繁之進

月清し風も身中む神の庵

肅毅

つ物おととぬよ家の殿守

春日坂木但馬

成章

り影あまた虫の鈴の音更亭

同 山本左衛門

永叙

第廿八 鶉

浪花

馬田昌朝

鶉ふきて尾花ぢみよる入江の形

光昇

さうぬ舟うく月北ゆふを連

官所

總代

雨を多し秋のむく雪 浮見を亭

安親

第廿九 鶯

同

岡本三右衛門

すむ鶯此あけ路もさゆる海池

知義

日うけの鶯乃さむからぬ聲

春日藤枝常刀

春敷

霜をうつるをさとし小埴の鶉明よ

光永

卷軸 冬梅

阿州平島

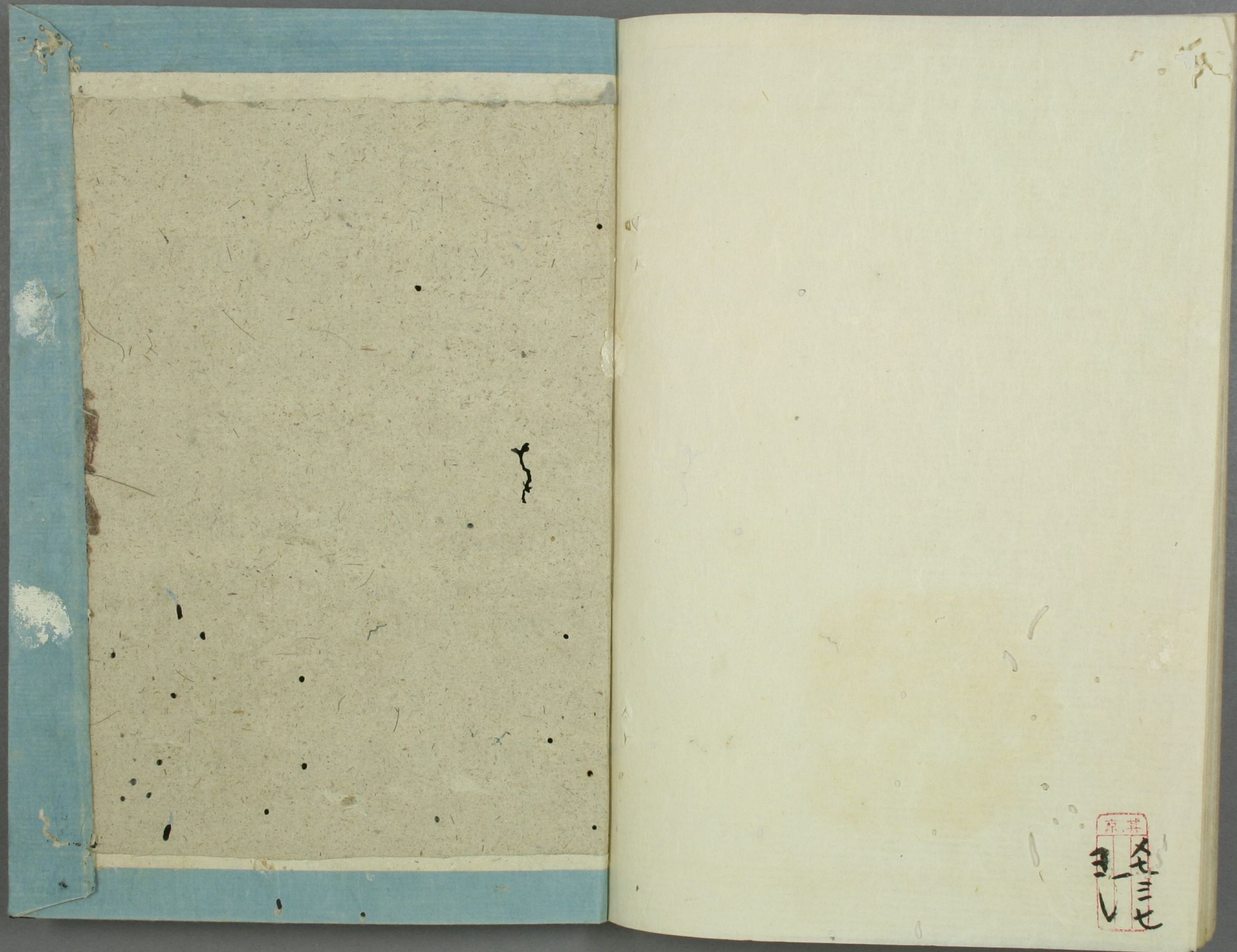
足利又右郎

青き川や千世ありそをむ雪の梅
 冬きみゆき里濃ぬのきね
 云は葉の乃と希き正孫ら麻執る

春日井原信濃守 義根
 同 千鳥筑後守 祐惟
 祐誠

社板





京井
五七三
七

